

## 論 文

## 幼児・児童の成長を支える「お話」の教育（I）

— シュタイナー幼稚園・学校における語り聞かせの教育を中心に —

広瀬 俊雄

現代社会学部・現代こども学科

岩崎 寛美

東広島シュタイナーこども園さくら園長

宮崎 直子

桜原こひつじ幼稚園教師

広瀬 綾子

兵庫県立ピッコロ劇団員

京都教育大学非常勤講師

## Kurze Einleitung

Geschichte und Märchen beeinflussen stark auf die Entwicklung von Kindern. Geschichte und Märchen sind die „Seelennahrung“ für Kinder und notwendig für die Entwicklung der Seele und des Geistes der Kinder. In den meisten japanischen Kindergärten und Schulen lesen Lehrerinnen und Lehrer die Geschichte und Märchen mit Bilderbüchern vor. Die Lehrerinnen und Lehrer erzählen kaum ohne Bilderbuch. Aber im Waldorfkindergarten erzählen die Lehrer und Lehrerinnen meistens ohne Bilderbuch, sie also erzählen kaum mit Bilderbuch wie in Japan.

Diese Abhandlung betrachtet die Erziehung durch Erzählung in dem Waldorfkindergarten und der Waldorfschule und erforscht das Detail. Das Inhaltsverzeichnis ist wie folgt.

- I. Der Grund der Wichtigkeit der Erzählung
- II. Die Auswahl der Geschichte und Märchen je nach Alter
- III. Das Vertrauensverhältnis zwischen Lehrer und Kind, welches die Erziehung durch Erzählung stützt
- IV. Erziehung durch Erzählung
- V. Die pädagogische Bedeutung der Erzählung

Diese Abhandlung betrachtet hauptsächlich Erziehung durch Erzählung in dem Waldorfkindergarten. Erziehung durch Erzählung in der Waldorfschule wird in der nächsten Abhandlung dargestellt.

## まえがき

昔話・童話が幼児や児童の成長に及ぼす影響は、この上なく大きい。昔話・童話は、心の健全な成長に是非とも必要な「心の糧」である。それは身体の健全な発達に必要な

Erziehung durch Erzählung, die die Entwicklung der Kinder stützt (I): besonders Erziehung durch Erzählung in dem Waldorfkindergarten und der Waldorfschule

食べ物に匹敵する。このゆえであろう、昔話・童話は、欧米でもわが国でも、保育園・幼稚園、小学校、図書館、公民館等で、教育として幼児や児童に盛んに与えられている。昔話・童話による教育は、一般的に良いとして承認された教育である。

しかし、この、一般的に承認された昔話・童話の教育には、検討すべき問題が少なくない。その大きな問題の一つは、昔話・童話を子どもに与える与え方である。周知のように、いま、その与え方で最も一般的なのは、昔話・童話にさし絵を多く入れた絵本を読み聞かせるという方法である。絵本の読み聞かせが降盛をきわめているというのが

現状である。

だが、この現状のなかであって、あまり注目されないが、地道に用いられている重要な方法がある。それは「語り手が、絵本等の本は一切用いることなく、昔話・童話を暗誦して、それを聞き手である子どもにじかに語って聞かせる<sup>(1)</sup>」という方法である。この方法はドイツ語では、Erzählung（エアツェールング）、英語では Story-telling（ストーリーテリング）という言葉で呼ばれる。わが国では、英語の「ストーリーテリング」がしばしば使用され、またときには「語り聞かせ」「お話」という日本語が使用される。

このストーリーテリング、あるいは語り聞かせ、または、お話は、絵本の読み聞かせよりも、想像力の育成、語り手の聞き手への人格的な作用、その他の点で優れている。この優れた作用を深く理解する人たちには、その方法や意義を学び、あちこちの幼稚園、小学校、公民館等でボランティアとして語り聞かせの活動を行なっている人が少なくない。

語り聞かせの教育活動を行なうにあたっては、語り手に多大の準備・労力が要求される。絵本の読み聞かせは、絵本があれば、誰でもできるが、語り聞かせは、絵本等の本は一切ないので、誰でも簡単にできるものではない。この準備・労力の多さのゆえであろう、幼稚園・保育園、小学校等のクラス担任で語り聞かせ・お話の教育を行なっている教師はことのほか少ない。ほとんど見当たらないといっても言い過ぎではない。語り聞かせの活動を行なっている幼稚園・保育園、小学校等でこの活動を担うのは、主として、外部からボランティアとして月に一回ほどやってくるプロのストーリーテラー・語り手である。

このような我が国の状況のなかで、最近、注目すべき事態が出てきている。それはクラス担任による語り聞かせの教育活動を行なうことを重視する世界的な幼稚園・学校がわが国でも設立されはじめたことである<sup>(2)</sup>。その幼稚園・学校とはR・シュタイナーの思想・理論を支えとする、シュタイナー（ヴァルドルフ）幼稚園・学校である。この幼稚園・学校では、毎日一回、クラス担任の教師によって、語り聞かせ・お話の教育活動が行なわれている。

本稿は、シュタイナー幼稚園・学校における語り聞かせ、お話の教育を取り上げ、それがどのようなものであるかを、次の章、即ち、Ⅰ.「お話」を重視する理由、Ⅱ.年齢に応じた昔話・童話の選択、Ⅲ.「お話」の教育の前提としての教師と子どもの厚い信頼関係、Ⅳ.「お話」の教育の活動の展開、Ⅴ.「お話」の教育的な作用、の五つの章によって、明らかにしようとするものである。

## Ⅰ. 「お話」を重視する理由

前述のように、シュタイナー幼稚園・学校では、毎日、クラス担任の教師によって、語り聞かせが行なわれる。この幼稚園では、入園してきた子どもは全員一日も欠かさことなく「お話」を聞く。この学校では、1年生から毎日すべての子どもが担任の教師の心のこもった「お話」を聞く。シュタイナー幼稚園・学校で、絵本等を一切用いないお話の教育をどれほど重視しているか。それは、この学校の入学式を見るだけでわかる。その入学式では、子どもたちに二つのプレゼントが渡される。一つは花束である。もう一つは、担任の教師によるお話である。担任の教師によって名前を呼ばれた子どもたちは、式の部屋の前方のイスに一人ひとり座り、そこでその教師から昔話・童話の語り聞かせに耳を傾けるのである。

では、なぜ、シュタイナー幼稚園・学校では、それほどまでに、お話・語り聞かせを教育活動として重視するのだろうか。それを重視する理由は何か。その理由としては、以下の五つがあげられる。

第一は、聞き耳を立てて、他人・周囲の人の話を聞こうとする欲求をもつのが、子どもの本性だということである。子どもは本性のうちにこの欲求を持つ。だから、教師はこの欲求を満たすために「お話」を行なうのである。

もとより、シュタイナー教育は、子どもの本性とは何か、つまり、子どもは成長しようとして、本性のうちにどのような欲求を持っているのか、ということを確認して展開される教育である。この教育では、子どもの本性を無視した大人の要求や国家・社会の要求は退けられる。何よりも重視されるのは、子どもが本性のうちに持つ欲求である。D. Udo de・ハーエスが述べているように<sup>(3)</sup>、子どもは聞き耳を立てて聞こうとする欲求を持つ。子どもにはこの欲求がうごめいている。周囲の人が話す言葉、あるいは、その話がどのような内容なのかは、子どもにとっては二次的なことである。最も強く大きな関心は、話や言葉の内容ではなく、話されているという出来事であり、言葉が語られている事実である。この出来事・事実に子どもは聞き耳を傾けるのである。

第二は、言葉というものが、子どもを成長させる優れた教育的・創造的な力をもっていることである。客観的な文化財としての言葉には、本質的に、子ども・人間を高め、成長させる教育力が備わっている。とりわけ、音声による教師によって話される生（なま）の言葉は、子どもの心身に作用し、その健全な発達へと導く。

言葉の教育に関して、注目しなければならないのは、テレビ・DVDから出てくる言葉ではなく、教師の魂のこもった人格に裏付けられた、なまの言葉が、教育力を発揮するということである。テレビ・DVDから出る言葉は、生命のない機械から出る言葉であり、教育力に欠ける。それゆえ、シュタイナー幼稚園・学校では「お話」の時間に、文明の利器であるテレビでアニメ化された映像を見せることは一切しない<sup>(4)</sup>。そこでは、教師が自分の魂のこもった生きた言葉で「お話」を語り聞かせる。

シュタイナー教育の祖・R. シュタイナーが言葉の教育力・創造力を主張するとき、引き合いに出す考え方に聖書のヨハネによる福音書の一節がある。この福音書にはこう記される。「はじめに言葉があった。言葉は神とともにあった。言葉は神であった。この言葉は、はじめに神と共にあった。万物は言葉によって成った<sup>(5)</sup>」。これは言葉にいかにか創造的な力が存在するかを見事に表現した一節であるが、シュタイナーは時代が進み、文明が発達するなかで、その言葉の創造力が衰退し失われていくさまを指摘する。シュタイナー教育に従事し、これを推進する幼稚園・学校の教師たちは、シュタイナーの考え方に依拠して言葉の創造力の衰退を食い止め、その創造力が十分に保障されるようにするために、教師の魂のこもった生の言葉による「お話」を大切にするのである。

第三は、「お話」が子どものうちに、「想像力」あるいは「空想力」を育てるということである。先に述べたように、シュタイナー幼稚園・学校で行なわれる「お話」は、童話・昔話であるが、この童話・昔話の中味は、想像の世界あるいは空想の世界である。子どもが童話・昔話を聞くということは、子どもが想像・空想の世界に浸るということである。「お話」を大切にすることは、子どもが想像・空想の世界に浸ることを大切にすることである。

子どもが「お話」を聞いて、想像・空想の世界に浸ると、想像力・空想力が伸び成長する。だから、シュタイナー幼稚園・学校では「お話」を重視するのである。

先に言葉を聞くことへの欲求が、子どもの本性に強くうごめいていると述べたが、子どもには、想像・空想の世界に浸って想像力・空想力を伸ばそうとする欲求も強く大きい。特に4～5歳から9歳までの子どもには、この欲求が強く大きい<sup>(6)</sup>。「お話」はまさに子どもの欲求を満たすものに他ならない。幼稚園・学校で「お話」が大切にされるのは、お話が想像・空想の世界に浸り、想像力・空想力を伸長させようとする欲求を満たすからである。

第四は、「お話」が教育者の心と触れあい、教師から愛

されたいという欲求を満たすということである。子どもはこの時期ではいつも教師から愛されたい、自分が愛されていることを確認したい、教師のぬくもりを感じ取り、安心して毎日を送りたいと願っている。教師の行う「お話」は、この子どもの願いを満たしかねる。ドイツの研究者クリステル・エールマンは、著書『語り聞かせをしよう』（Einfach erzählen! Ein Übungsbuch zum freien und gestalteten mündlichen Erzählen. 2001）という本を書き、その中で、語り手の子どもへのお話の聞かせが、子どものうちにぬくもり、安心感、愛情確認などもたらしめることに注目するが<sup>(7)</sup>、シュタイナー教育の考え方は、このエールマンの見方と同じであるとみてよいであろう。

第五は、「お話」を聞くことを通して、詳述すれば、「お話」で展開される出来事・事件等にふれることを通して、こどもは日常生活や後の生涯で体験するようなさまざまな人生上のことがらを想像の中で経験し、「人生の準備」ができるようになるということである<sup>(8)</sup>。もとより、子どもは日常生活で、また、児童期、思春期、青年期、さらに壮年期や老年期において、人や事物とのかかわりの中で、喜びや悲しみ、楽しさや苦しさ、誠実さやウソ、勇気や忍耐、試練や克己、恐怖や安堵、怒りや憤り、悪への反感や善への共感、満足や不満、いら立ちや落胆、挫折や敗北、孤独や自信喪失、明るい希望や気分の高揚、愛や憎しみ、利己主義や利他主義、傲慢や謙虚、その他、多くのことを体験する。童話・昔話には、これら多くの人生上のことや、道徳性に関わることが組み込まれている。それゆえ、子どもは「お話」を聞くことを通して、これら多くのことを心の中で経験し、生き方の準備ができるのである。例を「オオカミと7ひきの子やぎ」にとって説明してみよう。

オオカミはウソをつき、変装して子やぎたちをだまし、家の中に入って、かれらを食べてしまう悪者である。子やぎはオオカミの悪知恵・誘惑にひっかかってしまい、オオカミのえじきになってしまう、か弱い動物である。この童話は一匹の機転のきく賢い子やぎとお母さんやぎによって、全員が救われ、オオカミが退治されるというハッピーエンドで終わる。この童話で描かれていることは、悪が存在し、善をおびやかすということ、親の約束を守らないととんでもない事態が起こり、一歩まちがうと途方もない悲惨で悲しいことが生じるということである。

現実の世界をみれば分かるように、ウソをつく人は多い。そのウソにだまされて甚大な被害を受ける人が少なくない。人間の世界はウソで満ちているといつてよいほどウソをつく人が多い。約束・注意を守れない子ども・人も多い。そ

のことは、例えば、信号が赤のとき、道路を渡ってはいけないと母親に注意されていたのに、母親の注意を聞かずに渡ってクルマにはねられ、大けがをする子ども・青年があとを絶たないことを思い浮かべるだけで容易に理解できよう。

「オオカミと7ひきの子やぎ」を聞く子どもは、この童話の中の事件を心の中で体験して、親との約束・注意を守ることの大切さを学びつつ、日常生活や後の人生でつつがなく生きていくことができよう、いわば「人生の準備」をすることができるのである。

以上、シュタイナー幼稚園・学校で「お話」が重視される理由について述べた。では、「お話」は具体的にはどのような形で行なわれるのであろうか。お話を行なうにあたっては、教師はたえず子どもの立場に立つことを求められる。教師は子どもの立場に立って、お話を展開しなければならない。子どもの立場に立つとは、主として次の二つのことを言う。一つは年令に即してお話の内容を選ぶということであり、もう一つは、子どもと語り手である教師との関係をしっかりと築いておくということである。教師はこの二つのことを守らなくてはならない。以下、この二つのことがどのようなものであるかを具体的に述べたい。

## II. 年齢に応じた昔話・童話の選択

シュタイナー教育の考え方によれば、子どもにとって「お話」、つまり童話・昔話の語り聞かせが必要とされる年齢は、3歳から9歳頃までである。とりわけ、7歳は昔話・童話を必要とし、これから多くの精神的な糧を得る、まさしく「昔話・童話の年齢期 (das Märchenalter)<sup>(9)</sup>」と呼ぶにふさわしい時期である。3歳から7歳までの時期の特徴の一つは、先に述べたように、この時期の子どもがぐんぐんと「想像力 (Phantagiekraft)」を成長させ、想像の世界に生き、その中で学ぼうとする欲求を増大させるということである。

もとより、子どもは単に視覚、聴覚、味覚、触覚および嗅覚の五官で、具体的に事物を体験して学び、満たされた生活を得たいと欲するだけではない。手足で触れる等の実際的な体験と同時に、心の中で想像力を働かせて、想像の世界の中で生き学びたいと欲している。教育者は子どものこの欲求に注目しなくてはならない。

その想像の世界への欲求を満たすのが、昔話・童話の語り聞かせであるが、子どもに語り聞かせる昔話・童話は、子どもの年齢を十分に考慮したものでなくてはならない。

というのは、年齢によって子どもの欲する想像・空想の世界が異なるからである。

まず、3歳ころから7歳ころまでの時期の子ども全体を貫く根本的な欲求としての想像・空想の世界とそれに対応する昔話・童話について詳しく述べてみよう。

この時期の子どもが欲するのは、単純で明るいほのぼのとした雰囲気に含まれた想像・空想の世界である。とりわけ、3～4歳ころの子どもは、このような世界に浸って満たされたいと願う。こうした子どもに適した昔話・童話としてグリム童話の『おいしいおかゆ』と『星の銀貨』等があげられる。シュタイナー教育で必修の教材として用いられるこれら二つは、わが国の語り聞かせ教育・研究家のあいだでも高く評価されている。例えば、佐々利代子は『おいしいおかゆ』について、こう書く。「ごく短いのに、起承転結のはっきりした、よく出来た話で、幼い子や初めてお話を聞くような子に向きます。おなべからこぼれ出したおかゆが、家中にあふれ、道も隣の家も、しまいには町まで埋めてしまう、こんなとてつもない空想に、理屈っぽい大人はついていけません、幼い子には、それがあがりあがり見えるでしょう。大まじめにうなずきながら、目を見張って聞いてくれます…… (後略) ……<sup>(10)</sup>」。また、佐々は『星の銀貨』について次のように述べる。「親もなく、家もない、貧しい女の子が歩いていると、次々、困っている人がやってきて、物をねだります。女の子は乞われるままに、最後の一切れのパンも、帽子も、チョッキも、スカートも、ついには、下着も脱いでやってしまいます。こうして女の子が、何ひとつ、身にまとわず立っていると、突然、空の星が落ちてきて、みんな銀貨になった、ただそれだけの話です。余りにもキリスト教のお説教だと、不評を買ったといわれますが、この話が好きだという人は多いのです。狭い宗教の枠を超えた、何か純粹で、きれいな、愛らしいものを感じるからでしょう。声を出してゆっくり読んでも三分ほどの短い話なのに、ちゃんとひとつ、話を聞いたという満足感があるのもふしぎ。幼い子にもよくわかるし、大きい子にも、大人にも喜ばれます<sup>(11)</sup>」。

これら『おいしいおかゆ』と『星の銀貨』の語り聞かせは、シュタイナー幼稚園では、ただただ教師が幼児の前で語って聞かせるというかたちで行なわれるだけではない。さらにこの幼稚園では、小さな舞台を設定し、その上に人形などを置いて、それを動かし、操りながら言葉を語って聞かせるという「人形劇 (Puppenspiel)」のかたちでも行なわれる。

次に、5歳以後の子ども欲求と、それに適した昔話に

ついて述べてみよう。一般に「お話」の教育を発達段階・年齢の視点でみると、Ch. エールマンの見解に示されるように、5歳が基準になる<sup>(12)</sup>。即ち、お話の内容は5歳を過ぎた子どもには、5歳未満に与えられたものとは違ったものをも与えるということである。5歳という年齢を一つの節目にする見方は、W. ch シモニスの見方に示されるように<sup>(13)</sup>、シュタイナー教育で「お話」を展開するときの大切なものである。

5歳以後の子どもが欲求として持つのは、さまざまな問題が克服されていく姿を、人間・動物を通して空想的に描いた世界である。また、悪がこらしめられ、善が勝つ姿を描かれた世界も、このころの時期の子どもの欲求である。この欲求を満たすにふさわしい童話としては『赤ずきん』『ホレおばさん』『ブレーメンの音楽隊』『いばら姫』『七羽のカラス』『カエルの王様』などがあげられる。

『赤ずきん』<sup>(14)</sup>を取り上げてみよう。この童話では、心のやさしい母親に頼まれて、病身のおばあさんにケーキとワインを届けに行く、「あまりのかわいらしさに、好きにならない人がないほどかわいらしい女の子・赤ずきん」が登場し、この女の子が悪いオオカミの誘惑に乗ったために、おばあさんとともに食べられてしまうが、狩人によって助けられ、オオカミは死んでしまうという空想の世界が描かれる。とりわけ、5歳の以後の子どもは、この現実にはあり得ない空想の世界を描いた童話が大好きである。

もう一つ、『ブレーメンの音楽師』<sup>(15)</sup>について述べてみよう。この童話に登場するのは、年老いて力がなくなり、飼い主からエサも与えられなくなり、餓死に追い込まれた役立たずのロバ、老犬になり、狩りも出来なくなって飼い主から殺されそうになっている猟犬、ネズミもとれなくなり、飼い主に水に沈められて殺されそうになったネコ、それに首をちょん切って殺される運命にあるオンドリである。この、いわば人生の晩年というべき時期に達した4匹の動物たちが考えたことは、晩年をブレーメンという町に行き、音楽師になって、弦楽器・リュートを弾き、ティンパニーをたたき、歌を歌って過ごすということである。4匹の動物・音楽師たちは、町へ行く途中、どろぼうが住む家を見つけ、どろぼうたちを追い払って、その家で生活することになる。童話はここで終わるが、飼い主の冷たい仕打ちを乗り越えて、力強く生きようとする4匹の年老いた動物の生き方は、聞く子どもたちの共感を呼ぶ。この非現実の世界を描いた童話も子どもたちの大好きなお話の一つである。

最語に、「童話の年齢」といわれる7歳前後の子どもの

内的な欲求と、それを満たすにふさわしい童話について述べてみよう。この年齢の子どもたちが持つのは、空想の中で、善や美の世界に浸って快感を味わい、その世界を心の奥から喜ぼうとする欲求であり、また、悪の世界を体験して、これに反感を募らせ、悪への不快感を湧き立たせようと願う欲求である。このような欲求は4～5歳ころから出てくるが、7歳前後になると、目立って強くなる。このことを考慮するとき、子どもにふさわしい昔話・童話としてあげられるのは、『ヘンゼルとグレーテル』『白雪姫』『灰かぶり（シンデレラ）』『ヨリンデとヨリンゲル』などである。これらの作品のいずれにも、愛の欠落した利己的な悪人が登場する。と同時に、心のやさしい善人が登場し、悪人からつらい仕打ちを受けて、苦しい日を送ることを余儀なくされるが、最後には、悪人が罰を受け、滅ぼされて、善人が幸せな生活を送れるようになるさまが描かれる。

『灰かぶり』<sup>(16)</sup>をみてみたい。

この童話では、金持ちの男の先妻の信仰心を持った気だてのよい女の子と、意地悪な後妻およびその娘である姉妹二人が登場する。後妻とその娘二人は、女の子をいつもほこりにまみれた状態にしておき、きたない身なりにさせておいた。それで女の子は灰かぶりと呼ばれた。その灰かぶりは、事あるごとに過重な仕事をさせられ、ひどい仕打ちを受け、満足な寝床さえ与えられない状態に置かれていた。後妻とその娘である姉妹の二人は、いつもいわゆる「まま子いじめ」をくり返していたのである。しかし、心のやさしい女の子はそれに耐えて懸命に生きていた。

あるとき、女の子がなくなった母親の墓前でお祈りしていると、真っ白な小鳥が現れる。この小鳥との出会いがその女の子に希望と救いを与える。後妻のまま母はくり返し女の子にまま子いじめをするが、女の子は小鳥だけでなく、山鳩や家鳩の手助けによって、そのいじめを切り抜ける。鳥たちの手助けによって、誰もが肝をつぶすほどの美しさを持った娘になり、王様の催す舞踏会に出る。そこで、女の子は国の王子に見初められ、結婚することになる。だが、結婚に至るまでの道は平坦ではなかった。まま母はくり返し邪魔をし、その娘二人は女の子を排除し、自分が王子の結婚相手になろうと、醜い企てをする。しかし、その企ては虚しく終る。とともに、意地悪く心の汚れた姉妹は、鳩に両目をつつかれて、一生、目の見えない生活を送ることになる。

『灰かぶり』はこのようなお話であるが、7歳前後の子どもに人気の高い作品の一つである。人気が高いのは、まま母とその娘二人が「悪人」として描かれ、先妻の女の子

が「善人」として描かれ、その悪人が罰を受け、善人が幸せな生活を送るさまが、空想の中で展開されるからである。

『ヘンゼルとグレーテル』<sup>(17)</sup>では、悪人である魔女が焼き殺され、善人として登場するヘンゼルとグレーテルは幸せな生活を歩むさまが描かれる。『白雪姫』<sup>(18)</sup>では、しつと深い高慢なお妃が悪人として登場し、最後に真っ赤に焼けたくつをはかされて死に至る。他方、白雪姫は王子と結婚して、幸せな生活を送る。『ヨリンデとヨリンゲル』<sup>(19)</sup>では、魔法使いのばあさんが悪人である。結婚の約束をしていたヨリンデとヨリンゲルという二人が善人である。この作品では、最後はヨリンゲルがばあさんを魔法が使えなくなるようにし、ヨリンデを救い出して結婚して、幸福に暮らすようになる結末で終わる。

これら『ヘンゼルとグレーテル』『白雪姫』『ヨリンデとヨリンゲル』が、7歳前後の子どもにとりわけ人気が高いのは、これらの昔話・童話に善人と悪人が際立ったかたちで登場し、悪人が懲らしめられ、善人が勝って幸福な人生を送れるようになるからである。

### Ⅲ. 「お話」の教育の前提としての 教師と子どもの厚い信頼関係

既に述べたように、子どもには、もともと、大人が話す言葉を聞き耳を立てて聞こうとする本性が備わっている。とりわけ厚い信頼関係を寄せる人物——例えば親——がそばで他人と話をしていると、子どもはその内容を理解できなくても、その人物の話す言葉に耳を傾けようとする。

聞き耳を立てて聞こうとする子どもの本性を存分に活動させ、それを満たすのは、子どもが心の底から厚く信頼できる教師である。このような教師が童話を語ると、子どもはその語られる童話に一心不乱に没入し、深く聞くのである。お話の教育で重要なのは、教師と子どもの厚い信頼関係である。その大切さを説く人々は、シュタイナー教育関係者に限らない。いわゆるプロの「語り手」、つまり、ストーリーテラーにもそのことを強調する人が少なくない。その一人、田窪雅美は、「語り聞かせの教育で大切なことは、何であると思いますか」との筆者の問いに対してこう答えた。「きょう見ていただいた園児たちがあれほど私の語る話に没頭し集中するのは、私との間に深い信頼関係が築かれているからです。大切なのは、信頼関係であるように思います<sup>(20)</sup>」。

前述のように、シュタイナー幼稚園・学校のお話の教育では、子どもと教師、つまり、子どもと語る人との関係を

この上なく大切にしている。その信頼関係を大切にすることがゆえに、語るのは子どもの「担任」である。この幼稚園・学校でのお話の時間に、プロの「語り手」がボランティアとしてやってきて、子どもたちの前でお話を語ることはない。担任の教師が語り手になり、昔話・童話を語るのである。担任の教師が語り手であることを求められるのは、お話の教育が教育として成立するには、子どもと語り手との厚い信頼関係が是非とも必要であるとの考え方による。

子どもとの信頼関係が薄い、あるいは、それが無い語り手が昔話・童話を語っても、お話の子どもへの教育的な作用は弱く小さい。その作用が強くて大きいものになるには、語り手が子どもと厚い信頼関係を築いておかななくてはならない。

言うまでもなく、子どもと厚い信頼関係を築くのは、子どもの担任教師である。毎日、子どもと接する担任教師は、毎日の触れあいの中で、子どもと信頼関係を築き、これを厚いものにしていく。ボランティアとしてお話の時間だけにやってくるプロの「語り手」は、毎日の触れあいのときをもつことが出来ない。それゆえ、子どもと厚い信頼関係を築くことは容易ではない。築くには、並々ならぬ努力がいる。

シュタイナー幼稚園・学校で、お話の教育において子どもと教師の信頼関係が重視されるのは、この教育においても、子どもの本性の欲求が何よりも大切にされているからである。シュタイナー教育の考え方によれば、子どものなかでも、とりわけ7歳以降の子どもは、尊敬し信頼できる権威者を得ようとする欲求、つまり、教師との厚い信頼関係を持つようとする欲求が際立って強くなる。しかし、このことは、それ以前の年齢の子どもには、このような欲求があまりないということではない。7歳以前の子どもにも、教師との厚い信頼関係への欲求は、7歳以後ほど強く大きくはないが、ある。ことに5歳ころになると、W・ch・シモニス指摘するように<sup>(21)</sup>、子どもにはその欲求が明確に現れ出てくる。

それゆえ、幼児期の子どもに教育に従事する教師も、児童期担当の教師と同じように、子どもの本性に宿るそのような厚い信頼関係への欲求に注目し、これを満たすように努力しなくてはならない。

「お話」の時間で、そうした子どもと教師との厚い信頼関係がいかに重要であるか。この考えに基づくとゆえに、シュタイナー幼稚園・学校では、ボランティアの巡回「語り手」ではなく、子どもと厚い信頼関係を築いているクラス担任の教師が、お話の時間を担当し、昔話・童話を語り

聞かせるのである。

#### Ⅳ. 「お話」の教育活動の展開

先に述べたように、シュタイナー幼稚園と学校では、毎日、お話の時間が設定されており、昔話・童話の語り聞かせが行なわれる。以下では、シュタイナー幼稚園での「お話」の教育を取り上げ、その教育が実際にどう展開されるかについて述べたい。まず、園の生活の中でお話の時間がどう位置づけられているかについて述べてみよう。

##### 1. 園生活におけるお話の時間の位置づけ

お話は園児が登園し、園児室の内と外で遊び、学びの活動をし、それを終えて帰り支度をした後の時間、つまり、退園の直前の時間に行なわれる。決して朝の最初の時間帯に行なわれるものではない。退園直前の時間に行なわれるのは、子どもの生活のリズムを考慮するからである。

シュタイナー教育の考え方によれば、生活におけるリズムは、子どもの成長にとって極めて重要な要素である。リズムの乱れた、あるいは、リズムに欠けた生活は幼児の成長を阻害する。

幼児の生活のリズムとは何か。それは、端的に言えば、「拡散」と「集中」のリズムのことである。幼児が心身とも健全な成長の道を歩むには、拡散と集中のリズムの中で、一日の生活を送らなくてはならない<sup>(22)</sup>。わが国のシュタイナー幼稚園での生活のリズムを具体的に記してみよう。

朝、幼児は親（保護者）とともに登園する。保育者・教師は園児たちを、畏敬と感謝の念をもって温かく迎え入れる。その際、保護者にも気を配り、握手してあいさつを交わす。園児たちは一日の身支度をし、徐々に室内遊びへと気持を移していく。室内では、教師は自分のクラスの園児のすべてに気を配りつつ、自分も模範者として遊び、手仕事等に力を入れる。園児たちは室内で実にさまざまな遊びをくり広げる。その遊びの特徴は、「想像力」あるいは、「空想力」を自由に活発に働かせて、生き生きと遊ぶことにある。そこでは、木の実や石、布や紐などの自然物や素朴な遊具は、園児たちの豊かな活発な想像力で、ときにはお菓子に変化し、ときには、家の屋根やテーブルや敷物に、また、ときには、ロープに変化する。そして、レストランごっこ、サーカスごっこ、ピクニックごっこなどの自由遊びが行なわれる。自分の想像力を自由に使って、つぎつぎに遊びを広げ組み立てていくこの時間は、幼児の意識状態の点でいうと、「拡散」のときである。

たっぴりと自由遊びに没頭した後は、お片づけをし、それが済むと、園児たちは朝の歌や詩を唱え、心を落ち着ける「集いの時間」を持つ。この時間は、いわば「集中」のときである。

その後、歌を歌い、リズムに満ちた言葉を口に出しつつ、身体全体を使った身振りで、四季の自然の移り変わりを体験したり、そこに生きる人間や動植物の生活を体験する“ライゲン”（Reigen、輪遊戯）の時間を持つ。この時間は想像力を躍動させ、身体に様々な動きを与えて、身体活動を行なう「拡散」の時間である。

それが終わると、昼食の時がくる。昼食時は園児たちは園で作られたごはんを皆で一緒に食べる。この食事の時間は食すことに集中しながらも、ホッと一息つくような心身の開放の時間でもあるため、「拡散」と「集中」の中間的な時間と言ってよい。

昼食後は、クレヨン画やにじみ絵（＝画用紙に水をにじませ、画用紙の上に水彩絵の具のついた絵筆で模様を描いて、色彩の出来具合を楽しむ絵画活動）といった芸術活動の時間を持つ。この時間はまさに「集中」の時間であり、園児たちは絵を描く活動や色彩の世界を楽しむ活動に没頭する。

その後、戸外に出て、園庭や原っぱで思い切り自由に心身を活動させて遊ぶ。園児たちは砂場で、お料理遊びをしたり、竹の棒を溝に入れて魚釣り遊びに興じたり、園庭を駆け回って遊ぶ。この時間は文字通り「拡散」「発散」の時間である。

こうした屋外での自由遊びが済むと、園児たちは園児室に戻り、帰り支度をしてお話の時間を迎える。この時間は5分～10分間ほどの静かなひとときであるが、教師の語り聞かせにじっくりと耳を傾ける「集中」の時間である。こうして、このお話の時間が園の一日の生活の最後を締めくくる。園児たちはこのお話の時間に魂の栄養をたっぷり受け取り、心身ともに満ち足りた状態で、この園での一日を終え、保護者のもとに戻っていくのである。

このように「拡散」と「集中」を繰り返すことが、シュタイナー幼稚園の一日の生活のリズムである。この生活のリズムは、幼児に安定感・充実感をもたらさずにはおかない。もとより、こうした安定感は、幼児の心身の成長のうえで、この上なく大切である。安定感は家庭に戻ってから生活を生き生きとしたものにする。そこでは、活力が生み出され、チャレンジ精神を必要とする遊びにも挑戦できる。親・保護者からのエネルギーをもしっかりと受け取り、自分の力を強め、豊かにして、成長の道を歩んでいくこと

ができる。次の日への意欲的な力をも保持するようになる。

## 2. 語り聞かせる昔話・童話の選択

お話の時間に語り聞かせる昔話・童話は、昔話・童話ならば何でも良いというわけではない。それは、幼児にふさわしい、年齢に即した適切なものでなければならない。すでに先述の「Ⅱ 年齢に応じた昔話・童話の選択」において、年齢に即した適切な昔話・童話の選択の原則について明らかにした。ここでは、さらに二つのことをつけ加えたい。

その一は、幼児にふさわしい昔話・童話は、昔から語り継がれた、歴史の風雪に耐えて生き残ってきた昔話・童話が選択されなくてはならないということである。これらには、人間の生き方に関わる重要な事柄、自然の摂理、その他について、いわば人類の叡智ともいうべきものがこめられている。シュタイナー教育の考え方によれば、そのようなものがこめられた童話の筆頭格は、グリム童話である<sup>(23)</sup>。その他、ロシアの民話、日本の民話、各国の語り継がれてきた昔話<sup>(24)</sup>にも、優れたものが少なくない。教師はお話の時間に臨むにあたっては、このような昔話・童話の選択に力を尽さなくてはならない。童話についてみると、今日、現代生活をつづった創作童話が続々と出版されているが、シュタイナー幼稚園ではそれを使用することは少ない。ただし、クラス担任の教師が全力を傾けて創作した、幼児にふさわしい自作の童話を使用することは、しばしば行なわれる。

その二は、一年間の行事や四季などを考慮して、昔話・童話を選択するということである。言うまでもなく、園児たちは園の中で、さまざまな行事を体験して成長する。この行事には、四季と結びついているものが多い。例えば、春の復活祭、秋の収穫祭、冬のクリスマスなどはそのよい例である。シュタイナー教育の考えによれば、行事・四季と関わりのある昔話・童話の語り聞かせは、子どもの想像力をより活発にし、子どもを豊かな想像の世界へと導く。それゆえ、例えば、クリスマスのころになると、園では、教師は子どもにクリスマスの行事を体験させつつ、イエス・キリストの誕生についての童話を語り聞かせるのである。

以上、お話の時間に園児に語り聞かせる昔話・童話の選択の原則について記した。以下では、その原則に基づいてお話を具体的にどう展開するか、その展開の実際を具体例をあげて、述べてみたい。

## 3. お話の実際的な活動

— 日本昔話『なら梨とり』<sup>(25)</sup>をもとに —

### (1) 『なら梨とり』の内容の吟味と語りの練習

秋になると、保育では、子どもたちは収穫祭などの秋に関する行事を体験したり、野山や畑に出かけて、食べ物・植物に触れる体験を持つ。園では秋の食べ物—例えば、ぶどう、リンゴ、梨など—を食べて味わう。このような園児の体験を考慮するとき、園児にふさわしい昔話の一つとして取り上げられるのは、日本の昔話『なら梨とり』である。ここでは、この昔話を取り上げる。そのあらすじは次の通りである。

むかし、あるところに、母親に三人の息子がいた。あるとき、母親が病気になった。そして、息子たちに山奥にある、なら梨を食べたいと言った。これを聞いた一番上の兄が、ぼくがなら梨を取りに行くと言ってでかける。その途中で、一人のおばあさんに出会う。おばあさんはなら梨のある場所への行き方を教えてくれる。だが、その息子は、おばあさんの指示に従わず、なら梨を手に入れる寸前に、沼の主へ食べられてしまう。二番目の息子もなら梨を取りに行くが、一番上の兄と同じようにおばあさんの指示に従わなかったため、沼の主へ食べられてしまう。三番目の息子はおばあさんの指示に従って、沼のほとりにある木からなら梨をもいで取ることに成功する。その際、ちょっとしたミスで、沼の主へ気づかれ、食べられそうになるが、おばあさんからもらった刀で沼の主をやっつける。すると、沼の主の腹から、食べられてしまった兄弟二人が出てくる。助けられた二人と一緒に、三番目の息子は梨を持って帰る。母親はなら梨を食べて元気になり、親子四人は仲良く暮らすことができるようになる。

このような内容をもつのが、昔話『なら梨とり』であるが、教師がこの昔話を園児に聞かせるに際して、まず、行なわなければならないことは、その内容をよく吟味し、検討しておくことである。『なら梨とり』で重要な点は三つある。その一は、三人の兄弟はみな親思いであることであり、その二は、親切な他人の言いつけを守らない二人の兄弟が不幸な目にあうことである。その三は、言いつけを守って行動した兄弟の一人によって、みなが幸福に暮らせるようになったということである。教師は秋の果物である美味ななら梨に思いを入れつつ、山の奥になら梨を取りに行く兄弟たちの様子を豊かにイメージしながら、そうした三つの点を心の中で熟慮しておかなくてはならない。

この昔話は5歳以後の幼児にふさわしいものであるが、4歳前後の幼児に語り聞かせてもさしつかえない。最後に



なら梨とりに行く息子が刀を抜いて沼の主を退治する場面は、ドキリとするところだが、話として「聞く」だけなので、若い園児への悪影響はない。

次に教師が行なうべきことは、『なら梨とり』を実際に何度も何度も声に出して読み、朗読することである。暗誦したら、実際に語る練習を繰り返し行なうことである。その場合、注意しなければならないのは、大げさなジェスチャーを織り込んだり、声を必要以上に大きくしたり小さくしたりするといった演技的なことを避けるということである。教師は淡々とした口調で語ることが重要であり、演技的なことは、どうしても必要な場合にだけ、取り入れるようにする。このよう語りを練習することによって、『なら梨とり』という昔話を自分のものとするができる。語り聞かせで重要なことは、語り聞かせる昔話を自分のものにするということである。教師はお話の前日までに昔話を自分のものにして、次の日のお話の時間に臨まなくてはならない。

## （2）園児たちの側の準備

お話の時間に、園児たちが教師の語り聞かせに集中して耳を傾ける状態になるには、前述のような準備を教師はしておかなくてはならない。しかし、そのような状態になるには、園児たち自身も聞くための準備ができていなくてはならない。シュタイナー幼稚園の教師は、その子どもの側の準備にも力を入れる。ここの教師は決して「お話が始まりますから、静かにしましょう」といった言葉による注意は行なわない。準備・導入はどのように行なうのであろうか。

すでに述べたように、お話の時間は、園の一日の生活の最後に設定されており、語り聞かせはこの最後の時間帯に行なわれる。この時間が近づくと、園児たちは外遊びを終えて園児室にもどる。そこで、家に持ち帰るものを整理したり、帰る身支度をし、円形に並べられている自分のイスに座る。園児たちがほぼイスに座るのを見て、教師は歌を口ずさみながら、小さな手遊びを始める。こうすると、ざわざわしていた園児たちは、歌のメロディーや教師の手元に意識を向け始める。また、準備が整っていない園児たちも、そろそろお話が始まりそうだということがわかり、急いで準備を整える。

教師は子どもたちの心が落ち着き、お話を聞く雰囲気ができてくると、グロッケンを膝に置き、歌を歌いはじめる。「おはなし、おはなし、はじまるよ～きょうはどんなおはなしかな～」。ペントニック（ドとファの

音のない音程）の簡単な歌であるが、園児たちは教師と一緒に口ずさむ。そして、教師はグロッケンを「レミソラシレミ」とゆっくりと奏でる。すると、園児たちの意識は一気にお話を聞くことへと向かっていく。

## （3）園児たちの前で語る

グロッケンを奏で終えた後、教師はいよいよ昔話『なら梨とり』の語りに入っていき。「むかし、むかし、あるところに、お母さんと三人の息子がいました……」。左から右へ、右から左へと頭を動かしつつ、園児の全体にたえず視線を送って、しっかりしたリズムに乗った口調で、淡々と語っていく。教師の語りが始まると、室内はしんと静まりかえる。ざわめきなど全く消え、園児たちは教師の語りに集中して耳を傾ける。実際に語り聞かせを行なってみればわかることだが、幼児の語り聞かせに対する集中力には、目を見張るものがある。絵や映像などなくても、幼児はみな語る教師にじっと目を向け、教師の言葉に吸い込まれるように没頭する。熱心に聞くさまを「食い入るように」という言葉で表現するが、幼児はまさに「食い入るように」教師の語る昔話に聞き入るのである。

さて、語り聞かせはすでに述べたように、昔話を暗誦して行なうものだが、それが幼児にすぐれて教育的な力として作用するものとなるには、ある重要なことが考慮されなくてはならない。ある重要なこととは、語るときの「間合い」と、語る教師の「内面性」である。教師が語り聞かせを行なうときは、この間合いと内面性を十分に考慮して語り聞かせを行わなくてはならない。

以下、これら二つについて述べたい。

### ① 間合い

幼児の前で語る時、教師が注意しなければならないことに、声の大きさ、明瞭さ、声の抑揚、語りの間合い等がある。これらのなかで、特に心得ておかなくてはならないことは、間合いである。

一般に、人前で話すとき、しばしば語り手に対して、「一呼吸入れて」とか「話すセンテンスとセンテンスの間に、間隔をとって」といったことが求められる。このことは、昔話の語り聞かせを行なう教師に対しても、求められることである。

教師はお話の最初から、つまり「むかし、むかし、あるところに……」から間合いを意識して語らなくてはならない。これを意識することは、教師が語り出す前に、一瞬、思いを過去に向けることである。教師自身が過去への思い

を持ち、「むかし」という言葉が胸に降りてきてから発することが大切である。むかしという言葉が胸に降りてくるまでの間が「間合い」のことであるが、この間合いは、3～4秒の短い間合いである。この間合いは幼児にとっては、聞く準備のための間合いといってもよい。この間合いの後に、教師は語りはじめる。すると、ごく自然のうちに幼児は聞くことへと引き込まれていく。

その後続く語りの中でも、間合いはあちこちで取り入れられなくてはならない。間合いを考えずに、早口で語る場合、その語り手の早口は、聞く幼児の心に息苦しさや忙しさをもたらさずにはおかない。早口の語りでは、子どもはゆっくりとした気持ちで語り聞かせを味わうことから遠ざけられる。教師は語りのなかでは、文の最後を言い終えた後、間合いを取り、その文が聞く幼児の側に届くのを見届けてから、次の文にうつるように心がけなくてはならない。そうすると、息をゆったりと十分に吐き切って、次の息が入ってくるため、教師は自然な呼吸のなかで、むせぶことなく語ることができる。間合いの入った語りの口調は、幼児の本性の欲求にふさわしいリズムに乗った心地よいものであり、それゆえ、模倣への欲求を呼び起こし、模倣活動を行なわせずにはおかない。「うちの子は家でも先生が語ってくださった昔話や人形劇でのお話を一言一句覚え、再現してしまいますよ。しかも、テンポや間の取り方も全く同じなんですよ」。これはシュタイナー幼稚園に通うある園児の保護者の言葉であるが、間合いに支えられた語り、いかに幼児にとってふさわしいものであるかを示す証左にほかならない。

ところで、語りにおける文と文との間合いは、幼児の「想像力」の観点からも極めて重要である。先述の『なら梨とり』の一節、即ち、「沼のほとりに、なら梨が鳴っていた。太郎はすぐさま木に登って、なら梨を取ろうとした。すると、太郎の影が水に映ったので、太郎は沼の主にげろりと吞まれてしまった」についてみてみよう。この一節では、「……鳴っていた」の後に「太郎は……」が続くが、大切なことは、この二つの文の間に間合いを入れてから、「太郎は……」を続けて語るようにすることである。決して、間合いを入れることなく、すぐに「太郎は……」へと移ってはならない。

間合いを入れるということは、二つの意義を持つ。一つは、語る教師自身のうちに、想像力が活動する余地が十分できるということである。つまり、間合いを取ることで、教師が実際になら梨が沼のほとりに鈴なりになり、ざらんざらんと風に揺れている様子を十分に想像し、太郎がなら

梨の木に足をかけ、木に登り始める様子をしっかりと想像できるようになるということである。もう一つは、間合いを取ることで、幼児も教師と同様に想像力を活発に活動させ、場面を想像して、昔話を楽しむことができるようになるということである。

## ② 教師の内面性

幼児の前に立つ教師に求められることとして、しばしば、内面的・精神的に明るくはつらつとしていること、生き生きしていること等々があげられる。また、幼児・子どもに畏敬の念を持ち、感謝の念をもつことなども、教師に求められる重要な内面的・精神的なことがらである。このような内面性・精神性を、昔話を語る教師は持たなくてはならない。だが、語る教師に求められるのは、そのようなものだけではない。さらに見過されてはならない重要なものがある。その重要なものとして、二つがあげられる。その一つは、先にふれたことだが、教師自身の想像力<sup>(26)</sup>である。もう一つは、教師の道徳的な心・感情である。まず、想像力について述べたい。

すでに述べたように、お話の教育を考えると、大きくローズアップされるのは、幼児・子どもの側の想像力の問題である。しかし、その教育を考えると、忘れてはならないことがある。それが、上述の教師の想像力の問題である。もし、教師に想像力が欠ける場合は、語り聞かせの幼児・子どもへの教育的な作用は、弱く小さいものになる。反対に、教師自身が、用いる昔話の内容を十分に豊かに想像しつつ語る場合には、幼児・子どもの想像活動も活発になり、その作用は一段と大きくなる。教師の内面を強く感知し受け取るのは、幼児・子どもの特徴の一つであるが、教師の内面の想像力・活動を幼児・子どもは受け取って成長していくのである。それゆえ、先にあげた『なら梨とり』のお話の場合も、教師はこの昔話のあらゆる場面を自分自身で豊かにイメージし、想像しつつ語らなくてはならない。

次に、教師の道徳的な心・感情について述べてみよう。先に述べたように、昔話・童話には、善、悪、利己心、非情、傲慢、不遜、ウソつき、ごまかし、蛮行、弱者への援助、等々の道徳性に関わることがらがあるが、織り込まれ、これらが元になって話が展開される。昔話・童話の中味をみると、留意しなければならないことは、語り手である教師が漫然と語るといったことはしてはならないということである。教師は、漫然とではなく、道徳性への思いを込めて語ることが重要である。道徳性への思いを込めてとは、具体的には、主としての次の三つのことを意味する。

第一は、昔話・童話に出てくる、ウソつき、いじめ、わがまま、約束の不履行、殺人等の「悪」に対して、強い反感の思いをもつということである。あるいは、「悪」に対して強い不快感を持つということでもある。

第二は、弱者や病気の者に手助けしようとする、悪者を退治しようとする、苦難を乗り越えて生きようとする、つまり、「善」といわれる様々なことに対して、強い「共感」あるいは「好感」を持つことである。「善」を心から喜ぶ感情のことであり、「善」への快感といってもよい。

第三は、ほのぼのとした幸せな明るい事態・出来事に対して、心の中で真底からの喜びを持つということである。

教師・語り手は心の中にこのような思いをしっかりと持ちつつ、昔話・童話を語らなくてはならない。もし、そうした思いをもつことなく、ただ漠然として語るならば、語り聞かせの幼児・子どもへの教育的な作用は薄く小さい。

『なら梨とり』の語りについていうと、次のようになる。まず、語り手は病気の母親へのやさしい心遣いを持つ三人の息子には、好感を抱いて語る。次に、おばあさんの助言を勝手に無視した二人の息子の行為に対しては、反感と不快の念をもちつつ語りを進めていく。そして、おばあさんの助言を誠実に受け入れて、なら梨をとりに行く息子には、拍手を送る共感の情を抱いて、語り聞かせを行なう。最後に、親思い誠実な息子（三郎）がなら梨を取り、沼の主を退治し、兄弟二人を助け出し、帰って幸せな家族生活を送るようになったことを心から喜びつつ、語って終る。

## V. 「お話」の教育的な作用

昔話・童話の語り聞かせは、幼児・子どもにどのような教育的な作用を及ぼすのであろうか。すでに「I. お話を重視する理由」の中で、その主な理由として、5つをあげた。その5つの中で、次の4つ、即ち、①聞き耳を立てて、他人の話を聞こうとする本性の欲求を満たす、②子どもの内に想像力、あるいは、空想力を育てる、③教師から愛されたいという本性の欲求、安心感への欲求等を満たす、および、④想像の中で人生のさまざまなことがらを体験し、人生の準備を提供する、は語り聞かせの教育的な作用の具体的な内容を示すものである。これらの四つは、語り聞かせの重要な教育的作用である。しかし、それら四つの他に、もう一つ重要なことがある。それは、昔話・童話の語り聞かせが幼児・子どもの道徳性の成長に強く寄与するという

以下、このことについて述べたい。

語り聞かせが道徳性の成長に強く寄与するのは、昔話・童話の中に道徳に関わるものが数多く題材として含まれているからであり、また、これを聞く幼児・子どもが道徳的なこと、および、不道徳的なことに関心を持ち、自分の道徳性を成長させようとする欲求を持つからである。昔話・童話の中に道徳性に関わるものが数多く展開されていることについては、すでに述べた。ここでは、幼児・子どもの道徳性への欲求について明らかにしたい。

シュタイナーによれば、幼児・子どもの本性のうちで大きいものの一つは、道徳的なもの・不道徳的なものを含む「道徳の世界」への関心である。「子どもは無意識のうちに道徳の世界に心を向けて見ます<sup>(27)</sup>」。「子どもは周囲の人の道徳性に関わることを、身振りやまなざし・目つきの中に見てとります。たとえ、大人がそれを観察できなくても<sup>(28)</sup>」。このシュタイナーの言葉に示されるように、幼児・子どもは道徳の世界に関心を示すのだが、関心だけにと留まらない。さらに一歩進み、自分の前に立つ大人の道徳の世界に入り込んで、それを模倣して取得し、自分のものにしようとする。これが幼児・子どもの姿である。ここで注目しなければならないことは、幼児・子どもが心を向けて模倣して自分のものにしようとする道徳の世界が、目の前にいる人物・大人が持つ道徳の世界だということである。

たしかに、幼児・子どもは昔話・童話の中で展開される道徳の世界に興味を示す。悪者が登場し、善良な者をいじめるのを聞くと、反感の念を持つ。善人が悪人を滅ぼして勝利するのを聞いて喜ぶ。しかし、それだけでは、幼児・子どもは悪への感情を確固とし自分のものにすることはできないし、善への好感の情を自分のものにし確固としたものにすることはできない。

自分のものにし、確固としたものにすることができるには、昔話・童話の道徳の世界が信頼できる教師によって、語られなくてはならない。重要なのは、子どもと厚い信頼関係を結んでいる教師が、昔話・童話の道徳の世界を語ることである。その際に、忘れてはならないことは、教師自身が先に述べたように、心の中で道徳性への思いをしっかりと抱いて、即ち、悪への反感や不快感、善への好感や快感を持ち、幸せな明るい事態・出来事に対して、真底からの喜びを持って語るということである。なぜ、教師がそのように語ることが大切なのか。それは、幼児・児童が文化財としての昔話・童話そのものからではなく、信頼できる教師の内面の道徳性への思いから、道徳的なものを模倣吸収して、自分のものにして成長する存在だからである。

それゆえ、どれだけ優れた童話・昔話の語り聞かせを行なおうとも、語る人が内面的に豊かで気高い道徳的なものを持たなければ、その語り聞かせは、幼児・子どもの道徳性の成長への寄与という点では、効力に欠ける。シュタイナーはスイスのベルンでの講演（1924年4月14日）で、「この、教師の心の中の道徳上の思いに基づく教育が、歯の生え変わりまで（幼児期、筆者注）の子どもにとっては、最も重要なものです<sup>(29)</sup>」と主張するが、この彼の主張は、シュタイナー幼稚園での「お話」の教育をも貫く根本的な見方である。

思えば、童話・昔話には、「言いつけを守らないと、命を奪われてしまうことになりますよ。だから言いつけはちゃんと守るんですよ。」「人には親切にしてください。そうすると、幸せが訪れますよ」といった、いわば、訓戒ともいえるべきものが多く含まれている。それは、4歳ころまでの幼児には、いまだ受容されない。しかし、5歳ころになると、幼児はそれを受容して、自分のものにするができるようになる<sup>(30)</sup>。この場合、受容を可能にするのは、前述の内面的に豊かで気高い道徳的なものを持った教師の存在である。

こうしたことからわかるように、「お話」の教育的な作用の成否は、語り手である教師の内面が道徳的か否かにかかっているのである。

## 結 び

以上、「幼児・児童の成長を支える『お話』の教育」を、次の順序、即ち、Ⅰ.「お話」を重視する理由、Ⅱ. 年齢に応じた昔話・童話の選択、Ⅲ.「お話」の教育の前提としての教師と子どもの厚い信頼関係、Ⅳ.「お話」の教育の活動の展開、および、Ⅴ.「お話」の教育的な作用、によって論述した。

シュタイナー幼稚園・学校の教育実践をみればわかるように、その実践には、昔話・童話を人形を用いて、劇で表現する人形劇がある。また、学校の第一学年からお話の教育は継続され、また、発展したかたちで行なわれる。

人形劇は教師が自作の人形を用いて、これを動かしながら、昔話・童話を語り聞かせるかたちで行なわれる。筆者はグリム童話の一つ『おいしいおかゆ』の人形劇をスイスと日本の両方の幼稚園で、実際に行なったが、両方の幼稚園の園児たちの喜びようは、この上なく大きなものであった。

シュタイナー学校の第一学年から継続して行なわれるお話は、エポックの授業としてなされるものと、この授業の

終わりの時間帯になされるものとの二つがある。また、学校には、「お話」を演劇のかたちで行なう学習活動もある。これらも、子どもたちが喜びと楽しさをもって浸れる教育である。

既に述べたように、シュタイナー幼稚園では、アニメ化された昔話・童話をテレビ等で見せることは全くない。それは、この幼稚園の関係者や教師が、テレビ等の映像が幼児・子どもにもたらす害を明確に認識するからである。かれらは、例えば、『ヴァルドルフ（シュタイナー）幼稚園のプランと実践』（Plan und Praxis des Waldorfkinder-gartens, 1987）の中では、「テレビの害。幼児にテレビを見せることに反対する訴え」との見出しのもとに、テレビが想像力や知力の発達その他に、多くの害を与えることを記している。

幼稚園の人形劇、学校での「お話」や演劇、テレビの害等については、稿を改めて詳しく論じたい。

## 〔註〕

- (1) 松岡享子『お話を子どもに』日本エディタースクール出版部、2001、13頁参照
- (2) 我が国でも、シュタイナー教育を実践する幼稚園・子ども園や学校ができはじめた。その主な幼児教育施設として、嶺町幼稚園（東京）、南沢シュタイナー子ども園、東広島シュタイナーこども園（広島県）、松原こひつじ幼稚園（福岡県）などをあげることができる。また、学校として、シュタイナー学園（学校法人、神奈川県）、北海道シュタイナー学園（学校法人）、京田辺シュタイナー学校（NPO法人、京都府）などをあげることができる。
- (3) D. Udo de Haes, Urbilder der Kleinkindseele, 1985. S. 9.
- (4) Vgl. Plan und Praxis des Waldorf-kindergartens hrsg. von Helmut von Kùgelgen (10. Aufl.), 1973. S. 68, S. 107~108.
- (5) 日本聖書協会、新約聖書（新共同訳）、「ヨハネによる福音書」（1989、163頁）
- (6) 広瀬俊雄『シュタイナーの人間観と教育方法』ミネルヴァ書房、1998、163頁参照
- (7) Vgl. Ch. Oehlmann, Einfach erzählen, 2001, S. 14.
- (8) Vgl. W. Ch. Simonis, Die ersten sieben Jahre, 1988. S. 89~S. 95.
- (9) Waldorfpädagogik in öffentlichen Schulen hrsg.

von der Freien Pädagogischen Vereinigung Bern,  
1976. S. 49.

- (10) 佐々梨代子・野村滋訳『子どもに語るグリム童話①』  
こぐま社、1990、181頁
- (11) 同上、②、1991、180～181頁
- (12) Vgl. Ch. Oehlmann, Einfach erzählen, 2001. S. 170.
- (13) W. Ch. Simonis, Die ersten sieben Jahre, 1988. S.  
87.
- (14) 植田敏郎訳『グリム童話集Ⅲ、ブレーメンの音楽師』  
新潮文庫、平成3年、183～189頁
- (15) 同上書、53～60頁
- (16) 佐々梨代子・野村滋訳、前掲書
- (17) 金田鬼一訳『グリム童話1』岩波文庫
- (18) 佐々梨代子・野村滋訳、前掲書
- (19) 植田敏郎訳、前掲書
- (20) 広瀬俊雄『子どもに信頼されていますか』共同通信社、  
2009、141頁
- (21) Vgl. W. Ch. Simonis, Die ersten sieben Jahre, 1988.  
S. 87.
- (22) Vgl. M. Seitz und U. Hallwachs, Montessori oder  
Waldorf? 1996. S. 134.
- (23) Vgl. W. Ch. Simonis, Die ersten sieben Jahre, 1988.  
S. 147.
- (24) 日本の昔話の一つである『桃太郎』もシュタイナー幼  
稚園では、しばしば取り上げられる。
- (25) 稲田和子・筒井悦子『子どもに語る日本の昔話』こぐ  
ま社
- (26) 広瀬俊雄『子どもに信頼されていますか』共同通信社、  
2009、140頁参照
- (27) Rudolf Steiner Gesamtausgabe, 309Band, S. 35.
- (28) Rudolf Steiner Gesamtausgabe, 309Band, S. 36.
- (29) Rudolf Steiner Gesamtausgabe, 309Band, S. 35.
- (30) Vgl. W. Ch. Simonis, Die ersten sieben Jahre, 1988.  
S. 87.